©George Cockle / Record Collectors

イラストレイション=花井祐介

STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

文＝ジョージ・カックル

第8回

アメリカ人が抱く、馬への特別な憧憬

アメリカ人たちは馬への憧れが強い。西部劇の影響なのだろう。TV番組「ローン・レンジャー」「ボナンザ」や映画『緑園の天使（National Velvet）』といった、馬が出てくる作品は人気だ。俺が初めてテキサスに住んだ60年代は、馬を持っている人たちが周りにたくさんいた。その時はダラスの郊外にあるオーク・クリフという場所に住んでいた。そこは面白いところで、大金持ちの家庭（Haves）の子供と貧しい家庭（Have Nots）の子供が同じ学校に通っていた。その二つのエリアの間には、我が家のようなミドル・クラスが住んでいた。リッチな人間は大きな牧場みたいな庭を持ち、レースで使うサラブレッドやカウボーイが使うクォーター・ホースを飼っていた。貧しい人たちも馬を飼っていたが、彼らは100坪もない泥だらけの庭で、鶏や山羊と一緒に飼育していた。馬といっても本物ではない。ウェルシュかシェットランドのポニーだ。本物の馬ほど高くないし、手入れも楽なんだ。リッチな家族は自分たちの牧場の中で馬を走らせているが、貧しい家族は飼っている馬に乗ってそばの山に行く。そんな様子を見て、テキサスという土地では、金持ちでも貧乏でも、馬を飼いたい気持ちに変わりはないんだなと思った。

●

今回はそんなアメリカでは馴染み深い、馬の歌をいくつか選んでみた。最初は**アメリカ**の72年のデビュー・シングル**「名前のない馬（A Horse With No Name）」**から始めよう。英米でチャートのナンバー・ワンに輝いたこの曲を初めて聴いたとき、俺も俺の周りの友達もみんな、ニール・ヤングが新しい曲を出したのかと思った。そのぐらいニールの曲に似ているんだ。でもよく聴いてみると歌詞はニールのような現実的な内容ではなくて、英語的にはちょっと陳腐な感じだった。でも、俺たちはそれにも関わらず何か深い意味があるのではないかと思いながら繰り返し耳にした。高校生の俺たちは、分かりにくい大人っぽい歌を聴いてはあれこれ考え、お互いの意見を言い合ったりしたものだからね。でも歌詞は、'The heat was hot'＝熱は熱かったとか'There were plants and rocks and birds and things'＝植物や岩や鳥など様々なものがあったとか、今思えば意味などなく、単に安っぽい。考えるだけ無駄だった（笑）。アメリカはこの後にもたくさんのヒットを出したけど、歌詞にはやっぱり深みがない。

でも、言葉の音とメロディーはぴったりだったので、許してあげよう。何を訴えたいのか分からない曲も多かったが、イメージが湧いてくるものばかりではあった。

この曲は、簡単に言えば名前をつけていない馬に乗って砂漠から海まで旅をする話。その過程で様々な動植物や風景に接するうちに気づいたことが歌われている。海に着いたとき、僕は馬を逃がしてあげた。海はその下に生命をたたえた砂漠のようなものだ。街の下には土でできている心があるが、人間はそこに愛を捧げようとしない…。砂漠や海は、見た目は平板だが、大きな愛を育んでいる。それに比べて人間が住む都会には愛がない。こう言いたかったのだろう。

メンバーの3人＝ジェリー・ベックリー、デューイ・バネル、ダン・ピークはイギリスに住んでいたアメリカ人だ。アメリカという名前も、アメリカ人風に歌おうとしているイギリス人だと思われたくなかったからつけたそうだ。この「名前のない馬」は、彼らのデビュー・アルバム"America"には収録されていなかった。シングルがヒットしてからデビュー・アルバムに入れ、タイトルも"A Horse With No Name"に変えて出し直したそうだ。ある文化のことを書くには、その文化の外にいる人間が相応しいとよく言うが、アメリカのヒットの理由はまさにそれだ。後にLAに拠点を移すが、当時彼らはイギリスに住んでいたから、子供の頃の思い出をもとに母国アメリカの曲を書いていた。ロマンティックなイメージを持っていたんだろうね。

America
"A Horse With No Name"
Warner Bros.［US］●BS2576
［1972］➔Warner Bros.［US］
◎2576-2

incl.'A Horse With No Name'

●

次は、**ポール・サイモンの「ワン・トリック・ポニー」**。80年のアルバムのタイトル曲だ。英語には、馬を比喩的に使った言葉や諺もたくさんある。例えば'Get off your high horse'は〈高い馬から下りろ〉。これは、偉そうにして入るんじゃないぞという意味だ。'Iron Horse'は直訳で〈鉄の馬〉だが、これは列車のこと。俺が好きなのは'Get back up on your horse'という言葉で、これは〈馬から落ちてもまた乗らないとだめだ〉。つまり、諦めてはいけない、もう一度頑張れという意味だ。

「ワン・トリック・ポニー」は同名映画の主題曲で、やはり馬を使った諺がテーマ。ポニーは、基本的に58インチ以下の馬を指す。ウェルシュかシェットランドは小さいからポニーと呼ばれる。カウボーイが牛の牧場で使う小さな馬はカウポニーと呼ばれる。サーカスで使う小さな馬もポニーだ。'one-trick pony'＝一つの芸しかできないポニーは、〈一発屋〉または〈一芸に秀でた人〉という意味で使われる。この曲では、サーカスで踊ることが役目の馬を歌っている。その踊りはすごいが、それしか芸はできない。でもその踊りはうまくて綺麗で、さも簡単なように見せつつプライドを持って演じる。そして、仕事が終われば草むらでのんびりするだけ。それに比べると自分＝歌の主人公は、余計な動きが多いし仕草はぎこちない。また、一日の仕事をこなす

Paul Simon
"One-Trick Pony"
Warner Bros.［US］●HS3472
［1980］➔Columbia［US］
◎88697932712

incl.'One-Trick Pony'

ためにいろんなトリックを使ってしまう…。

この曲の主人公はミュージシャン。ミュージシャン仕事、すなわち一芸だ。ポニーの演技やその清々しいまでの生き様に比べて、自分の演奏や暮らしぶりはどうなのか。歌の主人公は、自身を省みている。

●

この曲もまた、馬を使った諺をそのままタイトルにした作品だ。**タワー・オブ・パワーの「ドント・チェンジ・ホーシズ（イン・ザ・ミドル・オブ・ア・ストリーム）」**は、ポップ・チャートで26位、R&Bチャートでは22位のヒットとなったシングルで、彼らの4枚目のアルバム『バック・トゥ・オークランド』（74年）に収録されている。歌詞は、主人公が彼女に別れないでくれと頼んでいる内容だ。5年間つきあったのに、なぜ別れるんだ？　君の愛があったから、いろいろなことを乗り越えられた…。このあと、僕はいつもいいヤツじゃあなかったけど、一緒にいてくれたじゃないか。夢をダメにしたくないんだったら、もう諦めようなんて言わないでくれと詞は続く。曲名の‘Don't change horses（in the middle of a stream）’は、直訳すると〈川の真ん中で馬を乗り換えないでくれ〉。つまり、始めたことを途中で変えてはいけないという意味。他のシチュエイションでも使える言葉だ。例えば、‘I'm making an apple pie, I can't make it peach, I can't change horses in the middle of a stream’＝アップル・パイを作っている途中で、それをピーチ・パイにはできないよ。こんなふうに使う言い回しだ。

曲を聴いていると、主人公は何か過ちを犯したようだ。‘I can't say, I haven't done any wrong’＝僕はいけないことをしていないとは言えない。その次に、‘Let him without sin, cast the first stone’と続く。罪がない人は最初の石を投げなさい。これは聖書に入っている言葉だ。彼は、彼女もいけないことをしているくせにと歌う。曲のサビには‘Giddy-up, giddy-up, Hi-o yeah, giddy-up, giddy-up, hi-o Silver’とあるが、この‘giddy-up’は、馬を走らせるときに使う言葉。そして‘Hi-o Silver’は、ローン・レンジャーが自分の馬のシルヴァーに呼びかけるセリフだ。

Tower Of Power
“Back To Oakland”
Warner Bros.［US］●BS2749［1974］⇨Warner Bros.［Germany］◎7599 27279 2

incl.‘Don't Change Horses（In The Middle Of A Stream）’

●

ザ・バーズの「栗毛の雌馬（Chestnut Mare）」は70年の『（タイトルのないアルバム）』からシングル・カットされた曲だ。アメリカのチャートでは121位までしか上がらなかったが、イギリスでは19位にまで達した。もともとは、リーダーのロジャー・マッギンが69年にウェスタン・ミュージカル“Gene Tryp”のために書いた曲（ミュージカル自体は実現しなかった）で、共同作家のジャック・レヴィはボブ・ディランともいくつかの曲を書いている。

アメリカ人は自然を愛しながらも、それを手に入れ飼いならそうとする。例えばグランド・キャニオンに流れる巨大な川にダムを作ってコントロールし、利用しようとする。ヨセミテの大自然を国立公園にしてフェンスで囲い、そこにいる動物まで管理する。自然発生した山火事を消して、環境に必要な摂理までコントロールしようとする。この曲の‘Chestnut Mare’は野生の馬、つまり自由と自然を象徴している。それを手に入れるということは、ワイルドで美しい自然を支配する、という意味になる。もう一つ、この馬は雌なので、女性をも意味しているんだ。

その雌馬はいつも1頭でいて、欲しくなるほど美しい。時々、見かける馬だ。いつか捕まえてやるぞ。僕の焼印を押して、永遠の友達になる。奥さんのような関係だ。話は続く。ある日、その馬にロープをかけて捕え、彼は跨る。乗ったはいいが、馬が走り始めてしまい、今度は下りることができない。最後はちょっと御伽噺な展開で、走り続けた彼らは一緒に谷間に落ちていき、結局は雌馬に逃げられてしまう。女性と同じように、自然をコントロールすることはとても難しい、と歌っているのだろう。

●

最後は**マイケル・マーティン・マーフィーとワリー・カンズラーの共同作「ワイルドファイア」**。マイケル・マーティン・マーフィーの『ブルー・スカイ：ナイト・サンダー』（75年）からのヒット・シングルだ。当時、彼はまだマイケル・マーフィーとして知られていたが、81年に映画に参加したとき、もう一人同じ名前の役者がいたので、本名のマイケル・マーティン・マーフィーに変えた。この曲は、ポップ・チャートでは3位、そしてイージー・リスニング・チャートでは1位にまで上りつめた。今でもアメリカFMのエアプレイではトップ20に入っている。歌の内容は、馬の幽霊の話だ。

最初のヴァースでは、主人公が出会った馬に乗る女性のことを歌っている。その女性はワイルドファイアと名づけた馬に乗り、ある日、山から下りてきて以来、主人公と一緒にいるようだ。しかしネブラスカ州の冬のある日（アメリカではネブラスカの冬がとても寒いということをみんな知っている）、生き物を殺すほどの霜が下りた夜に、ワイルドファイアが小屋を壊して逃げて、猛吹雪で馬の行方は分からなくなってしまった。ここからはコーラスが入る。‘She ran callin' Wildfire’＝彼女は叫びながら、ワイルドファイアを探しに走った。

次のヴァースでは主人公の話になる。暗い月の下で僕は飢えていた。早い時期に雪が降り、もう六日間、窓の外ではフクロウがずっと鳴いている。僕のことを彼女が呼びにきているのは間違いない。ここでもう一度コーラスになるが、ちょっと言葉が変わる。‘We'll be riding Wildfire’＝僕らは二人でワイルドファイアに乗り、このつらい生活を捨てていく。死んで幽霊になった馬、そしてその馬に跨る女性と一緒にこの世を去るというわけだ。

俺は小学校の時、乗馬クラブに通っていた。60年代に淵野辺にあった米軍キャンプは、そのために存在するんじゃないかというほど、乗馬クラブが広かった。でもいつも不思議だったのは、アメリカのキャンプなのに、乗せられたのはウェスタンじゃなくてイギリスのスタイルだった。でも、そこにはきれいな金髪の年上の女の子がいたので、俺はやめられなかった（笑）。

The Byrds
“（Untitled）”
Columbia［US］●G30127［1970］➔ソニー◎SICP30417～8

incl.‘Chestnut Mare’

Michael Murphey
“Blue Sky・Night Thunder”
Epic［US］●KE33290［1975］⇨Epic［US］◎EK33290

incl.‘Wildfire’

©George Cockle / Record Collectors